

号は止まっている。どうぞ事故の無い様にと祈る思いで見送った。この時駆けつけてくれたカーボランティアは、自宅で被災したが夫婦で担当日、「行こう、こんな時だから行かなければ・・・」と駆けつけてくれた。

- ・事務所内は書類や機器類が倒れ散乱、厨房もガス、電気は使えない。「明日9時に会いましょう」と約束して、暗くならないうちにと帰宅を始める。弁当を作り終えたメンバーが自転車で配達に加わり、そのまま直帰となった。

#### ○17時20分頃

- ・最初の1台が戻り、2回目の配達を引き受けて出発。2階事務所では電気が点かず仕事が出来ない。武田は駐車場に下り、帰宅するメンバーの見送りや、配達から帰ってくるメンバーの対応、連絡係をする。

#### ○18時40分頃

- ・事務所両隣にあかねのお弁当を届ける。蝋燭の明かりの中で家族が寄り添いながら座っていた。

#### ○19時40分頃

- ・やっと最後の配達車が戻って来た。後かたづけを簡単に済ませ、武田と清水は20時前事務所に鍵をかけて帰宅。

### 3月12日（土）

- ・9時頃、武田が事務所に出ると、メンバーは余震の中、携帯電話の情報を片手に事務所、厨房、サロン、外回りとかたづけを始めていた。事務所内外の破損具合を確認、パソコン、エアコン不調、サロン備品大量破損、ガス、電気不能、臨時運営員会で「今、何をするか、何が出来るか」を話し合あう。
- ・ケアマネジャーは、すぐに利用者の安否確認に動く。
- ・訪問介護は、ヘルパーの予定が入っている利用者には、極力変更せずに安否確認を主に訪問を続けることに。
- ・配食は、13日、14日、安否確認を兼ねて無償でお結びをお届けすることに。
- ・事務局は、メンバーの安否確認と外部対応をすることを決定。
- ・サロンは「当分お休みをさせていただきます」の張り紙をする。
- ・メッセージボードを玄関前に出し、「お疲れ様です。あかねグループにお越しの方々、メッセージを書いてください」と書き、ホワイトボードを掲示した。13時過ぎ皆で帰宅する。
- ・武田は、3月12日から50日間、あかね定番スタイル、のびのびパンツ、徳利セーターにジャケット、帽子、短靴、大き目のストール、携帯電話、そしてリックサック(手帳、財布、水、お結び1個、チョコレート1箱、タオル、ビニール袋5枚、下着類1式)で過ごす。

### 3月13日（日）

- ・お結びの配食開始。「私たちに出来ることは食事をお届けすること、安心をお届けすること」との思いで、ひたすら励ましの心を直接お届けして安否を確認することにした。「利用者様に無償でお届けする。皆さんもボランティアでの活動をお願いします。」と武田から話す。全員快諾。電話回線が不通なので、配達ボランティアも、調理ボランティアも自発的に集まった人たちで対応。ボランティアの自発性、自主性、責任感が発揮された。
- ・食材は米160<sup>kg</sup>（15日分）、ストック食材が二週間分。携帯ガスコンロで調理を始めたが、炭もある。一斗缶に穴を開け火をおこした。ご飯が炊けて準備が整い、配達のボランティアも揃う。まだ温もりの残るお結びを持って、いざ出発だが、ガソリン不足のため自動車から自転車に乗り換えての配達となった。

### 3月14日（月）

- ・この日もお結びの配食。
- ・朝、「食材があるし、一斗缶の炭の残り火があるから豚汁を作って道行く人に振る舞おう。」

即、作業開始。100食分ほど、肌寒い日なので大変喜ばれる。

### 3月15日(火)

- ・配食活動を休んで臨時理事会、今後の活動を話し合う。「食は命を紡ぐ大切なもの、この寒空に食するものがないとは・・・私達に出来ることは作り、届ける事、途中で中止することは出来ない、1ヶ月、50万円くらいの赤字で、2ヶ月間の活動をする」と決定。午後電気が点いたことを確認、点検。

### 3月16日(水)～4月15日(金)

- ・電気炊飯器と電磁調理器、カセットコンロを使用して160グラムのお結び2個に副食1品350円でお届けとすることとした。4月1日からはご飯に主菜、副菜、漬物を付けて配達。
- ・近隣の農家が畑の野菜を提供して下さり、全国の配食のNPO等からは多くの食材や物品の提供があった。
- ・4月15日までこのスタイルで継続。4月15日ガスが復旧。16日点検のため休み、

### 4月17日(日)

- ・配食の完全再開。この日は、カーボランティアの有志が盛り花を贈って下さり、活動再開にまさに花が添えられた。

## 4. その後の活動

### 1) 災害支援指定車としての依頼

- ・仙台市に対し、配達用の車両を災害支援指定車としてガソリン供給するよう仙台市に依頼した。しかし仙台市からは不可の返事。その後の情報では、警察に依頼書を出すことも可能になることもあるとのこと。

### 2) 関係団体への発信

- ・配食サービスやNPOのネットワーク関係団体に被害状況、活動状況を発信した。

### 3) 情報誌の号外の発行

- ・4月4日には、あかねグループの情報誌「あかねいろ」の号外を発行。利用者等に3月11日以来の活動状況を報告するとともに、「カンパのお願い」を呼び掛けた。
- ・「寄付金」以外に次のような物資の不足を訴える。

○ビニール袋 No.10、No.11	○アルミカップ10号	○シンク大(2台)
○使用できる食器洗浄機(もしくは修理して下さる方)		○水道蛇口
○弁当箱	○物品整理棚	○米
○食材	○パソコン	○エアコン

### 4) 地域ネットワークとの共同プラン参加

- ・「長期的な被災者支援にむけて」

### 5) 被災者支援

- ・避難所から仮設住宅に移った人々が、なかなかバランスのよい食事ができない現状があることを知り、あかねグループに対する全国からの支援へのお返しの意味も込めて、食事に困っている仮設住宅の方々に無償でお弁当をとどけることにした。当初は一軒一軒にと考えたが、仮設住宅がコミュニケーションをとりにくい環境であることを知り、開催されることになったサロンにあわせて届けることにした。

○9月16日(金)若林区荒井の仮設住宅にて



・全部で 50 食を配達、スズキの粕漬け、肉じゃが 等



6) マニュアルの見直しと、非常用品の備蓄

- ・米:10 日分、ライフラインがストップした場合最低 5日分の水、食材(乾物類、缶詰、調味料、携帯コンロとカセットガス、ラップ、アルミホイル、ビニール袋(普通使用、大きな袋も多めに)、懐中電灯、電池、ラジオ。

## 第5章 地域で支え合うコミュニティデザインの未来

### —地域住民の力で実現した100歳になっても安心してらせる コミュニティデザイン事例—

#### 1. はじめに

ふきのとうは、地域の中での関係づくりやつながりに苦勞し、住民や自治体との戦いを通してコミュニティデザインを創り上げていった。その一方で、地域が団結して自らの環境を変えていったコミュニティデザインもある。

伊勢原市の愛甲原住宅で活躍する NPO 法人一期一会は、地域の人々から出資をえて、「100歳になっても安心してらせるコミュニティ」の実現に成功した。人、もの、金、情報等の流れと関係を分析することで、成功に至った秘訣、この事例におけるコミュニティデザインのしくみを明らかにしていく。

また、愛甲原住宅の約 2/3 の世帯を占める伊勢原市高森台地区は、2010 年時点で高齢化率 32.8%であり、2050 年に予想されている日本の高齢化率 39.6%に近く、近未来のコミュニティのあり様を見せてくれる。2011 年 2 月に国土交通省は『国土の長期展望』中間とりまとめ概要を出しているが、2050 年には、単独世帯が全世帯の約 4 割をしめ、その半数以上が高齢者世帯であることが示されている。さらに人口全体は急速に減少し、2100 年には明治時代の後期に匹敵する 4771 万人へと減少することが予測されている。

一層高齢化が進んだ社会の中で「100歳になっても安心してらせるコミュニティ」の実現に向けた地域ニーズは何か、どのように実現しうるのか、そして食事サービスをどのように活用していくのか、NPO 法人一期一会は、数々のユニークな解決策を編み出している。私たちに多くの学びと希望を与えてくれる。

#### 2. 「風の丘」の紹介

NPO 法人一期一会は、1987 年に愛甲原住宅に住む主婦が結成した家事援助団体を母体とし、1998 年高森台ミニサロン、2003 年デイ愛甲原、2006 年小規模多機能居宅介護施設と住宅型有料老人ホームが一体となった「風の丘」の開設、2009 年に住宅型有料老人ホームの増設、2012 年にコミュニティスペース CoCo てらすを開設し、元気な時から、終末期まで、100歳になっても



写真1 住宅型有料老人ホーム「風の丘」の外観

元気で暮らし安心して生き終わられるコミュニティを実現した。また、高齢者だけでなく、

子どもたちが参加し、老若男女が会える場もつくり出している。

サービス内容は、①元気老人と老若男女の拠点、②デイサービス、③配食サービス、④介護保険外の生活支援サービス、⑤居宅介護支援事業所、⑥小規模多機能型居宅介護施設、⑦住宅型有料老人ホームであり、7つの事業を展開している。

しかも、特筆すべきは、デイ愛甲原、「風の丘」小規模多機能型居宅介護施設と老人ホームからなる「風の丘」、さらに老人ホームの増設、コミュニティ

スペース CoCo てらすという核となる4つの施設を9年という短期の間に開設しているだけでなく、資金は全て住民からの貸付と住民からの土地の提供をうけており、全てコミュニティの力で実現してきたことである。

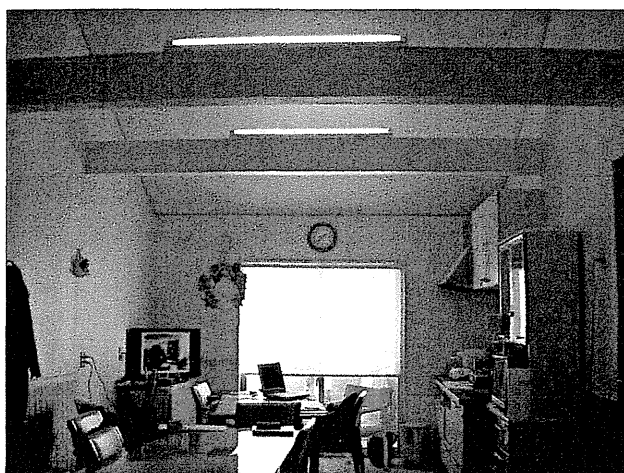


写真2 ケア付ハウス風の丘の居間

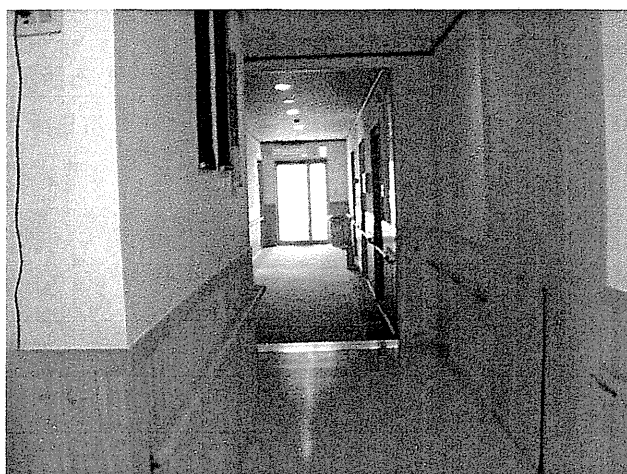


写真3 ケア付ハウスの増築部分

### 3. 地域の特徴

NPO 法人一期一会は、「愛甲原住宅」を主な利用圏としている。この住宅地は、厚木市と伊勢原市の2市にまたがり、厚木市愛甲で約300戸、伊勢原市高森台で約600戸、併せて約900戸の分譲住宅地である。1965年頃から、国家公務員共済組合が各省庁組合員に分譲した。東京オリンピックが終わり、東名高速道路が開通する前にあたる。居住者の第一世代は国家公務員であり、高学歴の人が多く、総じて聡明でプライドが高いことが住民の特性である。分譲当時は、一つの自治会だったが、両市に自治会ができ、連絡協議会を1990年ごろまでもっていた。国家公務員のいる家庭で、自分たちの環境は自分たちで創り出そうという文化を育んできた。愛甲原児童館、高森台児童館は、両市の市民が寄付を集め、誘致した実績をもっている。

これまで相手の生活に踏み込まないよう距離を保ってきた近所づきあいが、高齢化率が30%を超えたころから、だんだんと歩み寄り、より親密につきあう傾向が出てきたという。子どもは便利な場所へ転居したり転勤や海外勤務などで独立していく世帯が多く、後には親世帯が残され、一人ぐらしや夫婦のみ世帯が多い。高所得、質実剛健な暮らしをしているために90歳以上の長寿者が多いことも特徴である。

人口減少社会が深刻化しており、住宅地の中でも空家が目立つ。まちの中心となる商店街も店舗があいついで撤退した。スーパーも撤退するとの噂がたった時は、住民が「買いましょ運動」を起こし、スーパーの移転を食い止めたという。「デイ愛甲原」は、肉屋と魚屋が撤退した後を借り受け、その後、隣の電気屋も移転したので、そこを「コミュニティスペース CoCo てらす」の場として借り受けたている。施設の場所を町の中心地にした理由は、まちの中心に高齢者を始めまちの人々が集まれる場所をつくりたいという思いと、商店街を寂しい場所にしたくないという2つの思いがあつての決断だったという。

#### 4. コミュニティデザインのしくみを探る

##### 1) 実現を支えた原動力ー第二世代のお嫁さんが、地域ニーズを聞きとり地域をつないだ

NPO 法人一期一会の理事長の川上道子氏は、60代に入ったばかり。愛甲原住宅の第二世代にあたる。1979年に夫の親と同居するためにこの地に移り住んだ。彼女ら第二世代は、第一世代の距離をおいた近所づきあいを継承させながらも、イベントを企画し地域で楽しむ術を身に着けている。小学校の設立記念日にバスを仕立てて、開設当時のデズニーランドにでかけたりした。

まちづくりのキーパーソンである川上氏は、この町の住民として、「一人でも多くの人が信頼できる人間関係の中で、最後まで住みたい地域で住めるようにしたい」「まちの人々が支えながら、笑いながら許しあいながら暮らせるまちをつくること。自分たちだけの力で暮らせなくなった人も、その人を支える人も輝いて暮らせるまちにしたい」と願い「自分のくらしを優先させるまちづくり」を進めてきた。

彼女の原動力の1つめは、ここで家族を看取り老いを迎える当事者としての思いから出発していることである。「住み続けられる条件が整えられる場所があること」は「人として生きる保証」であり「未来の自分への保証」であるとしている。川上氏自身が介護を必要とする97歳の義母と共にくらしている。嫁として、本人にとっても介護者にとっても安心できるくらしの提供という当事者の体験と願いが原動力になっている。NPO 法人一期一会も「いのちの尊厳や参加と責任を大切にす」という理念をもち、「自分らしく暮らすを応援する」というミッションを掲げている。

2つめは、地域のニーズに敏感であり、そのニーズに応える形で実践を展開してきたことである。最初の活動である「伊勢原ホームサービス」を立ち上げた発端は、隣の奥さんに夕食のおかずを分けてほしいと頼まれたことにある。1987年に幼稚園で同じように義母と同居しているママ友9名と低料金の家事援助サービス団体を立ち上げる。1998年に川上氏を知る議員から「高齢化の進んだ高森台で勉強会をしないか」と声をかけられ「高森台福祉のまちづくり勉強会」を始める。自治会長や老人クラブ会長、民生委員、学識経験者に声をかけ、高森台地域の住民全員にお知らせを届け、まちぐるみで勉強会を開く。その頃川上氏の義母の友人が、住み慣れたまちに愛着を残しながら、子どもとの同居や施設への入所のために次々と去っていく姿をみて、一人になってもこのまちで最後まで暮らせる

しくみを考えたいと思うようになっていた。勉強会の中でも参加者にアンケートをとったところ「この町に住み続けたい」という意見が多くみられた。2003年にデイ愛甲原をオープンさせるが、その1年後、利用者の家族から「知人がたくさんいて、母が喜んで通っているデイ愛甲原に小規模多機能ホームをつくって欲しい」と頼まれる。「一人暮らしを続けるのが不安」「知らない施設に行くのは怖い」「ショートステイに行くのは、一人で寂しいからいやだ」という声をデイサービスの利用者から沢山聞いていた。「地域のニーズは向こうからやってくる。ニーズに応えていったら、今の姿になった」と川上氏はいう。

3つめは、何といっても川上氏の行動力である。高校時代は演劇部で活躍し、会社に入れば組合の婦人部長を頼まれるなど、組織にかかわる体験をもってきた。子どもが小さい時には、保育園の先生に頼まれて延長保育を行う「ちびっこひろば」を立ち上げたり、娘たちがヴァイオリンを習いはじめると「伊勢原ジュニアオーケストラ」をつくったりと地域で必要と思うものを進んで創り出してきた。目標を見定めると、行動に移すのが早い。

## 2) 豊かなネットワークと、出会いの場のプロデュース

川上氏は、同じ地域で活動してきたママ友、生活クラブ生協のつながりによる地域を超えたネットワーク、学習会を通じた地域住民や学識経験者とのつながり、さらに、家事援助やデイサービスを通じた利用者とのつながりというように何層ものネットワークを築いている。さらに地域の人々が出会える場をプロデュースしているのだ。1998年から高森台ミニサロンを月に1回開催している。これまで60名の住民が参加しているが、これは愛甲原住宅600戸の1割にあたるという。ここでのつながりはデイ愛甲原の利用につながっていく。2004年にはデイ愛甲原の休館日にあたる水曜日を「水曜サロン」とし、コンサートや散歩の会を企画し、地域のだれもが利用できるプログラムを提供していく。水曜サロンが独立したのが、2012年に開設された「コミュニティスペース CoCo てらす」である。これらの地域の働きかけによって、地域へ活動を浸透させ、勉強会の知名度もあがるという相乗効果をあげ、福祉のまちづくりを地域ぐるみの運動とした。「知り合いの数と幸せ度は比例する」というのが彼女のモットーである。

## 3) 生活クラブ生協から学び

福祉施設の運営のノウハウと人材を支えたのは、生活クラブ生協のネットワークである。

藤沢でくらし子供が2歳の時に、生活クラブ生協に加入する。その後、伊勢原市に転居し、幼稚園のママ友から誘われて再加入した。当時、ワーカーズ・コレクティブという働き方が生協の広報誌で紹介されていた。そのころ、地域の元看護婦さんから都内の住民参加型の家事援助サービスを紹介され、そこに加入しながらノウハウを学び、地元でホームサービスをたちあげる。

1998年の「高森台福祉のまちづくり勉強会」をはじめた翌年の1999年に、生活クラブの知人から、神奈川ネットワーク運動の代表、又木京子氏の講演内容を書いた冊子を紹介

される。当時愛読していたマリリンファーガソン著「アクエリアン革命」の「右でも左でもない中道をいく必要性と、女性たちが連携して社会を動かしていく」と重なる内容に共感する。「伊勢原にもネットを創ろう」と知人に伝えたところ、平塚から伊勢原に越してきた山下貴子氏を紹介される。山下氏は平塚でネットワーク運動に参加していて、伊勢原でも生協のネットワーク運動を作りたいと願っていた。頼りになるパートナー山下氏との出会いは、今後、福祉事業を進める上で欠かせないものとなる。このように神奈川ネットワーク運動・伊勢原は、三人の女性によって始められた。

福祉事業を進める際に、又木氏は、川上氏に大きな影響を与えている。「町でデイサービスを作りたい」と又木氏に伝えたところ、「NPO 法人を立ち上げるもよし、社会福祉法人でもよし、最初は MOMO からスタートしてもよし」といつてくれた。NPO 法人 MOMO とは、暮らせるサービスを作ることを目的にした組織で、サービスハウスポポロを運営している。福祉制度に不慣れであった当時の川上氏は、NPO 法人 MOMO の傘下で、サービスづくりを進めていく。ワーカーズという組織形態を選んだ理由は、「みんなで作る意識を育てることを、町の人に伝えやすい」方法と考えたからである。ワーカーズは、「資本をだし、労働をし、運営に責任をもつ」組織形態であるが、川上氏は、理事長の責任を全うするために、現在は労働には参加せず、経営に専念している。

デイサービスの建設や運営のノウハウについては、MOMO や MOMO の母体であるケアセンターあさひから得ている。「デイサービスの建設費用は、住民から寄付を募り、できるだけ多くの人に参加してもらうことが大切である」とアドバイスしてくれたのも MOMO である。老人ホームの個室のトイレの設置、浴槽でのリフターの取り付け方法など、使いやすい洗練されたデザインが持ち込まれている。小規模多機能や老人ホームのスタッフ研修は、MOMO やあさひにお願いしてきた。このような経験を踏まえて、2006 年に独自の NPO 法人、一期一会が立ち上がる。

このように先輩に習い、無理のない学びの期間を経て独立していくという、手堅い方法をとっている。しかし、先人の枠を超えた展開がある。学びの中からオリジナルなしくみを生み出していくのが、川上流である。

#### 4) 個人と信頼関係を築く

風の丘建設に際して「遠くの親戚より近くの隣人」という住民同士の信頼の絆が育む物語があった。現在の小規模多機能型居宅介護施設、住宅系老人ホームといわれる「風の丘」は、もとは津崎能子氏の住まいであった。自分の老後が安心して暮らせることを条件に、津崎氏は、川上氏に土地を提供する。もともと津崎氏の夫は、自治会長を務め、芝生の庭を地域の子どもの遊び場に開放するなど、地域のために尽くした人であった。能子氏も会費制のバーベキュー大会を企画するなどして協力した。

夫が亡くなった後、一人暮らしになった津崎氏は、脚立に乗って電球を取り換えている時に転倒し、動けなくなる。退院後、地域で評判の高い川上氏の「伊勢原ホームサービス」



を利用するようになる。丸3年にわたり食事づくりなどくらしの支援が行われた。川上氏のお子さんが豆まきに訪ねるなど、家族ぐるみで自然なつきあいを続けてきた。デイサービス愛甲原が開設されると、その利用者にもなった。土地を高齢者施設建設のために寄付することについて、親族から異論が出されるが、津崎氏が体調を崩した時に、駆けつけてくれたのが川上氏だったので、頼りになるのは「遠くの親戚より近くの隣人」であると確信し寄贈を決心する。

「風の丘」は、1階が小規模多機能型居宅介護施設、2階が6室の個室とデイルームで構成されている。津崎氏はこの部屋の一室を自分のすまいとし2007年に亡くなられる。「風の丘」という名前のおり高台の上にあり、見晴らしと風通しのよい場所である。津崎氏が思い描いてきた「信頼できる人と住み慣れた町で暮らし続けたい」という言葉が現実のものとなった。

#### 5) 学習会を通じた町づくりムーブメントの形成ー地域の信頼関係の構築

川上氏は、地域へひらいた勉強会という方法で、老後のまちづくりへのムーブメントを構築してきた。愛甲原住宅の第一世代の居住者は、公務員であり高学歴な人々である。勉強会には馴染みが深く、学ぶことが上手な人々である。「講座」「ゼミ」といった学習会は、地域の人々の興味をひく。高学歴なこの地域では、勉強会を中心にした取り組みは、この地の住民特性にあった方法であった。そして重要なことは、勉強会を始める時は、愛甲原住宅の全戸に案内をポスティングしていくことである。住民全員に知らせることで、勉強会はまち全体の共通話題となる。この手法は、1998年の「高森台福祉のまちづくり勉強会」と、2004年の「マイケアプラン講座」「高齢者の住まい方講座」「小規模多機能の学習会」で活用される。1998年の勉強会によって、高森台ミニサロンの委託が決定し、その後、デイサービス愛甲原が開設される。前述したように、デイサービスの利用者家族から小規模多機能ホームの建設を依頼されていたし、多くの高齢住民の不安の声を聞いていた。日中の「通い」だけでは支えきれない、より介護度が重い人も地域で暮らすことができるよう、新しい事業を起こそうと考えた。「通い・泊まり・訪問」を組み合わせる連続的なサービスを提供する小規模多機能型居宅介護施設や、ケア付き住宅に狙いを定めた。次々と勉強会を開く一方、土地も探し始めた。2004年の「小規模多機能の学習会」で、参加していた津崎氏が土地の提供を申し出て、「風の丘」が誕生する。

学習会による知識の共有化は、資金を集める際の布石となっている。川上氏がまちを歩き、出会った地域の人々に、デイサービス建設や小規模多機能施設において資金提供が必要なことを説明すると、またたく間に寄付が集まった。相手はすぐになぜ資金が必要か聞いてくれ、3人に1人が快く貸し付けを申し出てくれたという。これは、高齢者のまちづくりの問題を地域の問題として誰もが参加できる形で扱ってきた成果と、日ごろの家事援助活動を通じた川上氏への信頼があつて可能になったことと推察される。

## 6) 資金作り

1987年に開設した「伊勢原ホームサービス」を母体とし、2003年から2012年の9年間、3年おきに、4つの施設を開設させている。すごいスピードである。川上氏は、このスピードこそ事業展開の秘訣という。時間がかかり留まっていたら、周囲からさまざまな横やりが入り、貸付者を集められなかったのではないかという。資金は、市民からの出資金と国と市からの交付金、生活クラブ生協の姉妹組織からの借り入れで賄い、これまで銀行からの融資は一切受けずに事業を展開させている。デイ愛甲原では、改装費1500万円を一口10万円、年0.5%の利子で30名から資金提供を受け、小規模多機能型施設の建設費の一部約7100万円は、一口100万円、年1%の利子で65名から、施設の増築費用1億円は、一口100万円、年1%の利子で46名から資金提供を受けている。これまで1億8千万円の借り入れをしたが、8千万円は返却し、残り1億円を今後10年で返済する計画であるという。

次々と事業を展開し、「安心」を形に変えることで、スピード感をもって「信頼」を築いていった。コミュニティ自らが、自分の力で安心して老いることのできるコミュニティの装置を備えていったのである。コミュニティに財力と理解力があれば、こんなにすごいコミュニティが実現できるのだ！ 資金面でソーシャルキャピタルが力を発揮した事例である。風の丘は、コミュニティに理解と資金力があれば、行政に頼らずとも、コミュニティ自らが出資してこうありたい未来を創り出せるという、希望の道筋を示している。

## 7) コミュニティデザインの核—人・モノ・金・情報を循環させるしくみ

この事例のコミュニティデザインのしくみは、①実践活動、②学習会、③出会いの場づくりという循環をとおして、まちづくりのムーブメントを竜巻のように起こしていったことにある。地域の信頼を勝ちえ、参加者をひろげながら、地域の問題として「福祉のまち

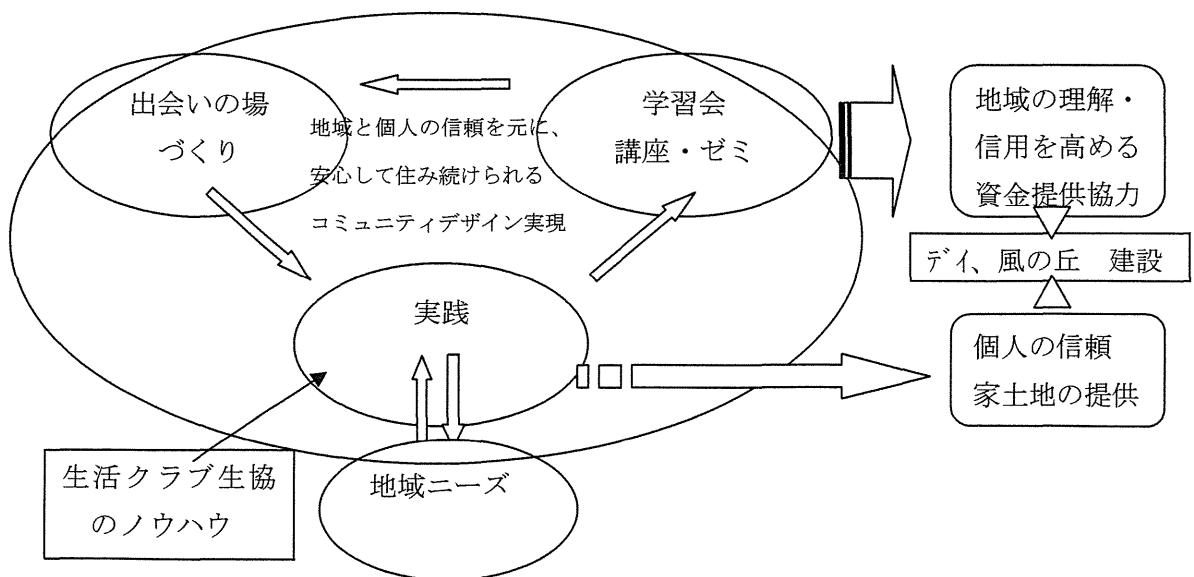
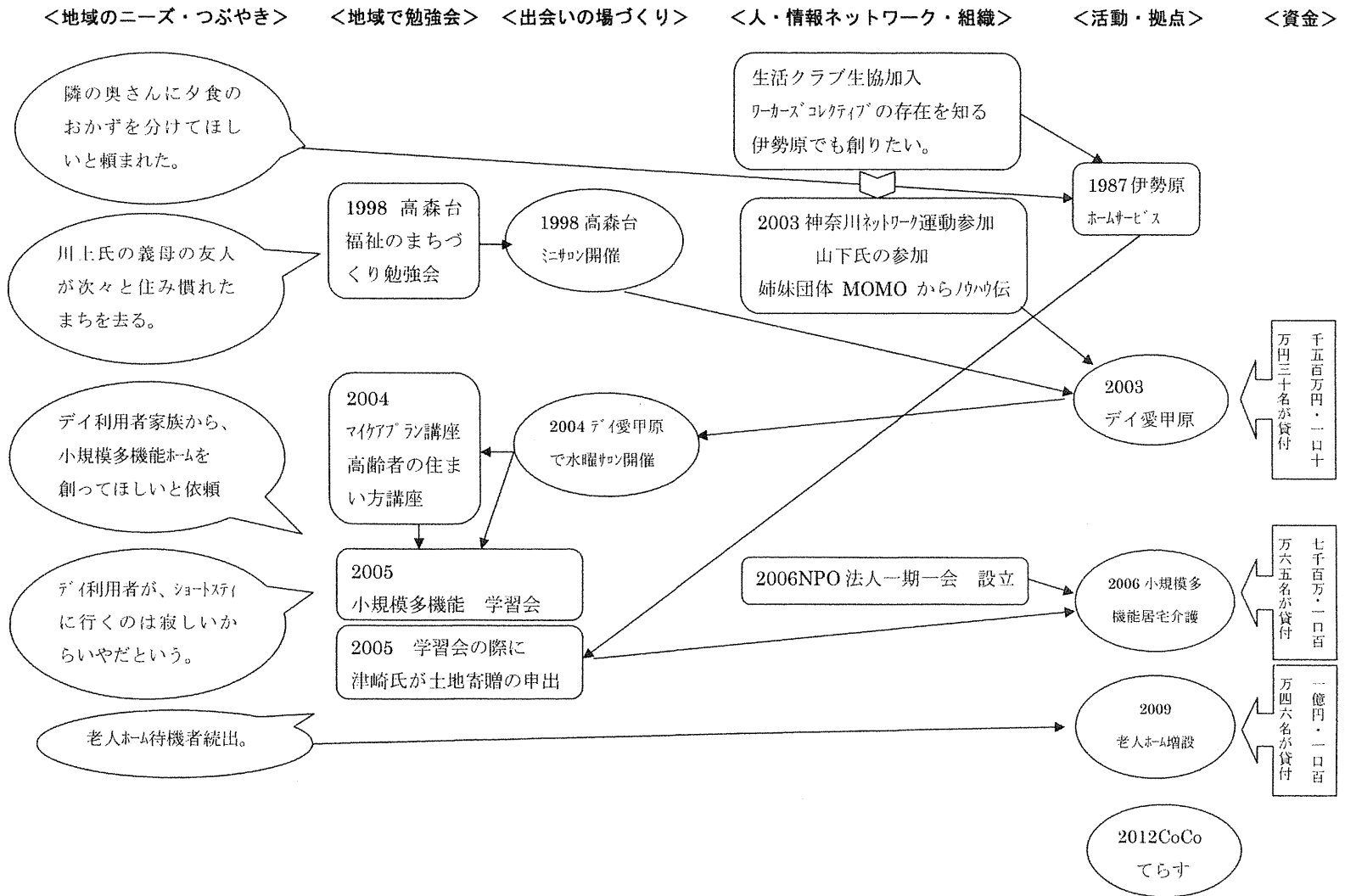


図5-1 実践、学習会、出会いの場づくりの連続的展開で地域と個人の信用を高める

図5-2 高森台のまちづくりに関わる要素間の時間的流れと相互の関係



づくり」と「小規模多機能型居宅介護と老人ホーム建設」に向けたまちづくりムーブメントを推進していった。

個々の活動の時間的流れと関係をまとめたのが、図5-2であり、概念図化したのが図5-1である。これらの関係地域の信頼を高めていくと同時に、実践活動を通して個人との信頼も高めていった。長い信頼関係のもとで、前述したように津崎氏の土地提供の申し出がなされたのである。

## 5. 「風の丘」での暮らし

1階は小規模多機能のデイルームと厨房と浴室・脱衣室、事務室、2階はトイレのない6部屋とトイレ2室と浴室・脱衣室で構成される。増築部分は、個室にはトイレがついて、1階は4室と事務室、2階は4室と地域の高齢者や入居者の家族が泊まれるゲストルームが1室ある。初めに建てられた6部屋には室内にトイレがなく共用の2つのトイレが用意されているが、夜中、入居者は一斉に自分でトイレに通ったために、夜中に、トイレラッシュがおこった。この経験を踏まえ、3年後の老人ホーム増設時には、各部屋にトイレが設置されることとなる。一部屋の面積は13.24㎡が8室と多い。最大で13.83㎡、最小で11.17㎡である。90歳になる入居



者の女性に話を聞いた。「狭くありませんか」とい写真4 右麻痺でも左麻痺でも使える手すりう問いに対して、「私の家は2軒先なので、ここには必要なものだけ持ってきている。夏物は自宅に置いてあるの」とのことだった。毎日自宅に通い雨戸の開け閉めを日課にしている。「ここだと知り合いだらけなのよ」。二棟目が完成するまで、老人保健施設に入所するなど待機していたという。「他の施設は、みんな寄せ集めですよ。お金のあるなしじゃない。ここは家庭的な雰囲気があっていい」という。



100歳の男性は、ベッドで過ごす時間が長い、写真5 天井走行リフターが設置された浴槽ホームの窓から自分の家を眺めることができる。入居者14人のうち13人がこの町の住民である。新しい「セカンドハウス」に安心し満足している様子が見て取れる。ここでくらすための費用は月約20万円と入居金の500万円である。入居金は一棟目は250万円であったが、二棟目から500万円に値上がりしたが、自宅を売却しないで済む額に抑えているという。家賃は4~5万円、水光熱費は1.2万円、管理費6万円、食費6万円（朝と夕）、介

介護保険料1割負担であり、合計で月20万円ほどになる。

多くの人は自宅をそのままにして、ここでくらしている。2拠点居住を実現しているのだ。まちの友人からは、「このホームに入れてよかったね」といわれる。

ここでは、施設特有の臭いはしない。丘の上を吹き抜けるさわやかな風の香りがする。入居者はどの方もさっぱりと身ぎれいにしていて、手洗いや洗顔がきちんとされていることがわかる。冬場の入浴は、週2回で一人ひとり入浴する個浴が行われている。浴室には天井走行リフターが取り付けられ、入浴する側も介助する側も安心して利用できるしかけが施されている。

食事は、基本的に3食用意されるが、不要の際には前日までに申し出をすることになっている。日常的には、朝と晩は、入居者が一緒に食事をとっているが、日中は自由に行動する人が多い。デイ愛甲原に通ったり自宅に戻ったりと思いつきに過ごしている。食事は厨房で手づくりされる。皆さん驚くほど残さずよく食べるという。食事がとれなくなったら要注意。体調に異変が起こっている証拠である。入居者は概ね90歳以上なので、いつ倒れてもおかしくない。夜中に救急車を呼ぶことも珍しくないという。入居者は、これまでの生活が継続できるという自由と、体調に異変が起こった時に助けられる安心感の両方を手に入れている。

昼間は自宅に帰れるという心の安らぎと、知り合いに囲まれている安堵感、清潔で、おいしい食事による高い生活の質が確保されている。顔見知りにもまれ、自宅にも戻れるので、新しい環境への不適應という問題は起こらない。まさに、くらしの「継続性が確保」されている。また、できることは自分でし、またお互いに助け合う、できなくなった所をスタッフが手伝うことで、「残存機能の活用」もなされているようだ。そしてスタッフは、入居者をこのまちの文化を築いてきた住民の一人として接し、一人ひとりの尊厳を大切にしている。「風の丘」のこれまでの生活を継続させながら、新たな安心を手に入れたすまいでは、「信頼できる人とこのまちでくらしたい」と願った津崎氏の願いそのままのくらしが、保証されている。

## 6. 配食時に本人を施設へ移送する、24時間ケアと結びついた究極の配食サービス

一部の人は、二拠点のすまいを手に入れるという選択をしているが、多くの人は自宅に住み続けている。彼らの安心を支えているのが、住宅型老人ホームの1階に設置された小規模多機能型居宅介護施設である。小規模多機能型居宅介護施設は、泊り、通い、訪問の必要になった方に一貫したサービスを届ける施設である。登録人数25名以下という上限が設けられているが、その上限までの登録がなされている。小規模多機能は、2006年の介護保険制度の改正で制度化された施設であり、日本独自の認知症ケアである宅老所方式を厚生労働省がすくい上げ、制度化したもので、「絶対量不足にあえぐショートステイの拡大を促すという点で評価」(浅川2006)されると指摘されている。しかし、ここでは、従来の意味とは異なる方法で活用されている。それは、夕食の配達時に、具合が悪ければ小規模多

機能型居宅介護施設か老人ホームに連れてきてしまうという方法である。配食サービスは、介護保険外の事業であり、単身世帯の認知症ひとりぐらしを見守る手段として活用することができる。「風の丘」では、1日8人前後が利用している。伊勢原市の補助制度を利用すると1食650円の補助が出るため本人は1食350円で利用できる。約半数が市の制度を利用しているが、この制度を使わない場合は、風の丘独自の配食サービスを利用することができる。その際は食費800円、配達費用に100円かかり1食900円となる。配食サービスの利用者には、小規模多機能型居宅介護事業の登録者も含まれる。施設長の山下氏は、夕食を届ける際に、具合が悪ければ、そのまま施設に連れてきてしまいその夜をすごしてもらおうという。彼女にとっては、自然な対応として何気なく話してくれたが、聞く側にとっては、初めて耳にする発想であり、「すごいぞ」と心の中で叫んでしまった。そんな配食サービスの活用方法は今まで聞いたことがない。そして、風の丘では、有料老人ホームにはゲストルームが一部屋あるので、1泊1万円を払えばだれでも泊まることができる。小規模多機能の登録者でなくてもよいのだ。これまでショートステイは、家族のために使われることが多かった。家族が外出するために、要介護の家族の世話ができない、家族が在宅介護を続けるために息抜きのために使われている。要介護者本人というよりも、支える家族のために必要なサービスとみなされてきた。しかし、ここでは違う。一人暮らしで体調の悪い不安な夜を、通いなれた場所で、よく知っているスタッフと一緒に過ごすことができる。そしてその組織では、自分の日頃の体調や処方されている薬についての保健医療や家族に関する情報を把握してしてくれる。このような状況であれば、「体調が悪いから、今晚風の丘に泊まりませんか」という申し出に対し



写真6 デイケアのある町の中心地



写真7 デイケア甲原の室内



写真8 CoCoテラスの入り口

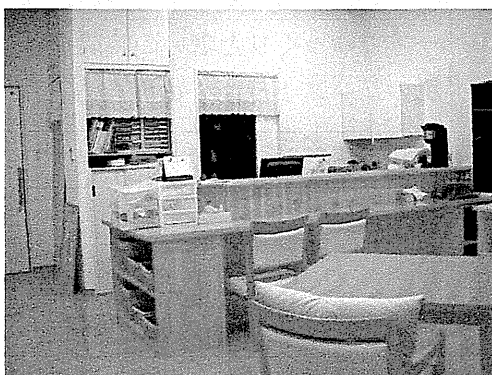


写真9 CoCoテラスの室内

て、素直にうなづくことができるのではないだろうか。体調不良時の家族看護に代わる役割を小規模多機能や老人ホームが行っているのである。これは、高齢者のみ世帯が心から望む支援の一つである。配食サービスの活用という観点から考えた際にも、相談機能と結びつき、「本人を連れてきてしまう」という究極の活用方法である。配食サービスであれば、小規模多機能型施設のように登録人数に縛られることもない。ホームヘルプサービスのヘルパーが、訪問時に本人の状況を判断し、このようなサービスと連携することも可能である。また、緊急時のお泊り希望者として事前に登録し、必要な時に自ら連絡を入れることも考えられる。受け入れるベッドと夜間に介護・看護してくれる人材の配置、その人の状態の見極めができる配達者または状況判断の指示がだせる専門機関との連携が問題である。そして、利用する本人も日常的に慣れ親しんだ場であると、一層安心して利用することができるだろう。

## 7. 会食の場の開き方と閉じ方

小規模多機能型居宅介護施設の1階のダイニングは、開設当初から「風の丘レストラン」として、夕食時、地域の人々が一緒に食事がとれる、地域にひらかれたレストランとして機能してきた。「一人で食べるのはさみしいから」と、地域の人々は曜日を決めて集まり、レストランにやってきた。馴染みの入居者と一緒に食事をとるために。「遠くの親戚より近くの他人、地域は一つの家族」としての姿がここにある。しかし、残念ながらこの「風の丘レストラン」は、2012年の4月から休止されている。原因は、入居者の心身機能の低下である。一緒に食事をとると、その人の健康状態がよくわかる。認知症が進んでいることもわかってしまう。お互いまちの住民同士であるだけに、人の口に戸はたてられない。認知症が進んだ入居者の様子がまちの中へ広まってしまうかもしれない。特に高齢になると、自分の老いが進んでいないことを確認したいがために、とかく相手の衰えた状態を話題にすることがある。このような危険性をみてとったスタッフの判断で、「町の台所」は現在閉じられている。この地域の人々にひらかれた会食の場としての機能は、2012年4月にオープンしたコミュニティスペース CoCo てらすが、引き受けている。

CoCo てらすの開設もあり、現在「風の丘」は、入居者とデイサービス利用者がそれぞれのペースでゆっくりと老いの時間を過せる静かで守られた場としての様相を深めている。

「風の丘レストラン」の開き方と閉じ方は、簡単に老人ホームの食堂を拓くことは難しい、ということを教えてくれた。開ける食堂とは、認知が進んでいない比較的元気な人たちを対象とすることが望ましい。実践からの貴重な学びである。

## 8. 次にめざすは多世代交流のまちづくり

2012年にデイ愛甲原の隣に開設した「コミュニティスペース CoCo てらす」は、介護保険に関係なく、地域をつなぎ世代をつなぐことを目的としている。団塊の世代には、介護予防の手段としてボランティアを呼びかけている。営業時間は15時～17時で、2時間500

円、飲み物代は実費となっている。曜日によるプログラムが大まかに決められている。月曜日は、見たい映画をリクエストできる日、火曜日は、初心者向けのマージャンの日、水曜日は足湯、木曜日はカラオケ・うたの日、金曜日は中級向けのマージャンの日、土曜日は月2回が上級者向けマージャンの日、他の2回が「こどもアート教室」や「愛甲原まつり」といった随時行われるイベントが組まれている。最後まで安心してらせるまちづくりを成功させた NPO 法人一期一会にとって、次なる課題は人口減少社会への挑戦である。いかに、子育て家族にとっても住みやすい魅力的なまちにしていくか。次なる取り組みが、「コミュニティスペース CoCo たらす」を中心に始められている。

### 9. 生活の連続性が確保された在宅支援施設と機能

この地域で住み続けるための生活の連続性が確保された在宅と施設機能が存在している。

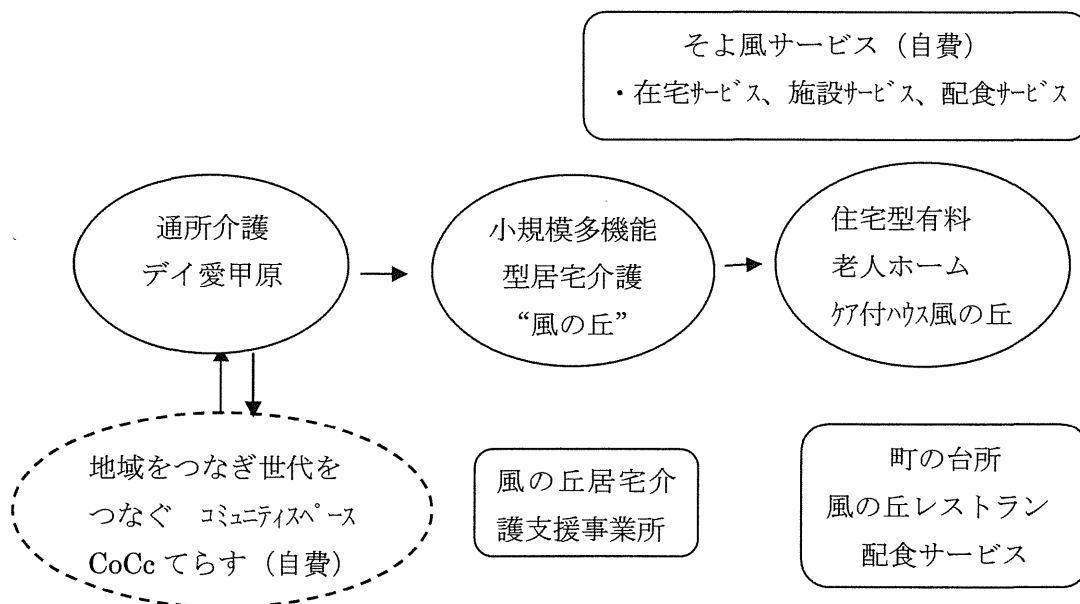


図5-3 100歳の一人暮らしでも、この町で住み続けられる生活継続のしくみ

NPO 法人一期一会のパンフレットには、各施設や活動内容が、心に入りやすいことばで次のように、紹介されている。

- ・元気な時はボランティア、地域参加ー CoCc たらす  
「介護保険に関係なく、地域をつなぎ世代をつなぎます」  
「団塊の世代の介護予防はボランティア参加で・・・」
- ・虚弱になったらー 風の丘居宅介護支援事業所、デイ愛甲原、そよ風サービス  
「介護保険の認定を受けた方、今の健康状態を少しでも維持・向上できるようにサポートします」「おひとりで過ごす時間が多い方・・・同世代が集います」



「おひとりでの入浴が不安な方」  
「機能訓練、脳トレで自宅で暮らせる体力や機能を維持したい方」  
・認知症になったらー 小規模多機能型居宅介護 “風の丘”  
「介護保険で様々なサービスを使いながら、まだまだこの地域で、なじみの人たちと暮らしたい方をサポートします」「ご家族の介護負担が増した方」  
「一つの事業所で訪問・通所・宿泊などのサービスを提供」  
・一人暮らしが不安になったらー 住宅型有料老人ホームケア付ハウス風の丘  
「住み慣れたこの地域で、自宅から住み替えて24時間・365日の介護サービスを受けることができます」 「一人暮らしが困難な方、ご家族での介護が困難な方」

10. 総合的な経営

NPO 法人一期一会は、4つの施設を運営している。経営的にみると順調な収益をあげているのは、小規模多機能型居宅介護施設「風の丘」、デイサービス「デイ愛甲原」、老人ホーム「風の丘」である。特に、小規模多機能型居宅介護施設である「風の丘」は、制度の上限である25名が登録している。高齢者の安心を支える部門は、地域のニーズと信頼をえ、介護保険制度にのっていることもあり、順調な経営状況であることが伺える。

しかし、商店街に登場した第二施設である「CoCo たらす」は改修費に1500万円をかけているが、この改修費を賄うことは難しいように思われる。ここは、居宅介護支援事業所と老若男女が集えるコミュニティサロンとしての機能をもたせているが、2時間500円という利用料は、維持費にはなっても収益にはまわらない。しかし、コミュニティサロンの機能は、この組織にとって重要な情報発信、宣伝部門であり、まちのムーブメントを創り出す発信源である。初期は高森台ミニサロンが、その後はデイ愛甲原の休館日を利用した「水曜サロン」がその役割を果たしてきた。これまで一時的な場であった地域に開く機能を常設の形にしたのが「CoCo たらす」である。このような地域に開かれた部門をもってき

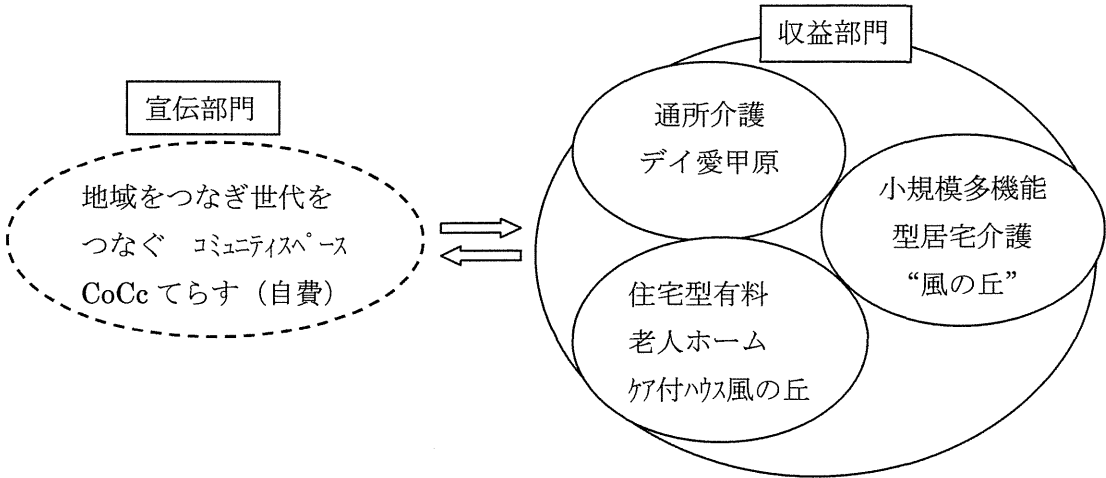


図5-4 トータルな経営で必要な機能を支え合うマネジメントの必要性

たからこそ、地域全体に知名度を広げ、理解を深め、地域に風を吹かせることができた。NPO 法人一期一会としては、これらの収益部門と宣伝部門を全体の組織としての経営の中で運営していくという発想をもっているのではないかと推察する。このように、強い企業や組織は、全体として持続可能性を高めるように、トータルで利益をあげていく。そのような姿を NPO 法人一期一会にもみることができる。

一方で、今回の事例から、地域をつなぎ世代をつなぐ、コミュニティスペース CoCc てらすの存在に着目する必要がある。収益をだすことは難しいながらも、まちづくりの共通理解を進め、相互扶助の実践活動に誘う重要な機能を備えている。資金面でも自立がむずかしいだけに、相互扶助のまちづくりの育成機能をもつこのようなスペースにこそ、公的助成を行うことがふさわしい場であると思われる。

## 11. トラスト・ミイが起こりうる要因は何か。信用を行動に変えられるコミュニティ

どうしてこのようにコミュニティの資金で、自分たちの望む場を創り出すことができたのか。

この地域が、公務員に売り出された分譲住宅地だったからか。居住者の年金が安定していたからだろうか。もちろん、資金提供のできる体力のある住民が多く住んでいるというのも要因の一つであろう。しかし、お金持ちが多く住んでいる地域は他にもたくさんあるが、このようなコミュニティが資金提供して自分たちの望む未来を創り出した事例にはめったに出会えない。

第一は、住民が資金提供能力をもっている地域かどうかであるが、それだけでは十分ではない。第二の街づくりは自分たちの力で、というまちづくりの体験が与えている影響は大きい。第三は、やはり信用がおけ、資金をきちんと運用できる有能な組織や個人が存在することであろう。川上氏というこの地に住む第二世代のお嫁さんが存在した。

この3条件が揃えば、コミュニティが「信頼できる人とこの町で暮らし続ける」環境を創り出すことができるのではないかと。特にまちづくりの経験は、現在をスタートとすればよい、という考え方もある。コミュニティによるまちづくりの絶対条件・必要条件は、託せる人か組織が存在することであり、重要なことは、託せる人が町の住民であり、当事者であり、他人ごとではなく、自分事としてかかわることである。そこで共に生きていく人が夢を形にしていく、まちの人々がその人や組織を信頼できるかということである。儲けではない相互扶助の価値にもとづいた行動であることが重要なのだ。豊かに生きること、経済的価値に基づかない自給自足の地域づくりの発想が、地域の信用を勝ち得る秘訣なのであろう。

川上氏の目線は、子育てができる未来のまちづくりへ向けられている。その拠点となるのが CoCo てらすである。今度は、「つくることを前提としないデザイン」(山崎 2012) が求められるのではないだろうか。現在町の中に点在し、増えている空き家は、放火があったり、知らない人が住み着いてしまったりと、まちの治安を悪化させる原因となっている。

もし、このような空いている土地がまとまり、緑の芝生になり、子供たちを遊ばせることのできるコミュニティパークになったらどうであろう。畑にするのも素敵である。不安な空き家の土地を等価交換などを使ってまとめ、豊かなくらしをもたらす空きスペースへと変える手立てが求められる。駅から離れていて多少不便でも、豊かなオープンスペースがあれば、子育てにふさわしい環境としての価値を高めることができるであろう。人口減少社会において住環境を向上させるチャレンジにも期待したい。

“Trust me” または “Trust us” といったまちの信用であるソーシャルキャピタル（社会関係資本）が、まちづくりを進めていく。愛甲原住宅の 2050 年のまちを先取りした試みに目が離せない。

## 12. 支え合いのコミュニティデザインがみせた未来図とその秘訣

### 1) 支え合いのコミュニティデザインがみせた未来図

愛甲原住宅のまちづくりは、高齢化率 40%、高齢単身世帯が一般的な住まい方となる 2050 年の私たちのニーズを先取りし、その答えを提示しているように映る。改めて特筆すべきは、①「風の丘」で実施されている多拠点型すまいとしての居住施設と、②高齢単身者が健康保持をするための本人のためのショートスティと、本人を連れてきてしまう配食サービスであろう。

① 自宅を残しながら新たな老人室である「離れ」に住むマルチハビテーション型施設入居  
一人暮らしになった津崎氏は、「この地で信頼できる人と暮らし続けたい」という思いを抱いていた。この思いを川上氏は重く受け止め、形にしたのが「風の丘」である。このようなくらしができることを条件に、津崎氏は川上氏に土地を提供した。入居者の 9 割はこの地域の居住者。入居一時金を 500 万円に抑えたために、家を売らずに、新しい安心のすまいに住み変わることができた。昼間は元の自宅ですごし、夕食は新しいすまいの仲間と共にし、自室で眠るマルチハビテーションを可能にしている。

### ② 体調の悪い不安な夜を過ごす、本人のための介護付き宿泊施設

一部の人は、二拠点のすまいを手に入れるという選択をしているが、多くの人は自宅に住み続けている。彼らの安心を支えているのが、住宅型老人ホームの 1 階に設置された小規模多機能型居宅介護施設である。

それは、「夕食の配達時に、具合が悪ければ小規模多機能か老人ホームに連れてきてしまう」という方法である。配食サービスを利用者と、小規模多機能の登録者に対して対応している。体調不良時の家族看護に代わる役割を小規模多機能や老人ホームが行っているのである。熱が出たりお腹が痛い、辛くて不安な夜を独りで過ごさなくてもすむ。高齢の一人暮らしを支える本人のためのショートスティの活用がなされていた。風の丘では、有料老人ホームにはゲストルームが一部屋あるので、1泊1万円を払えばだれでも泊まれるようになっている。

これは、高齢者のみ世帯が心から望む支援の一つの形である。配食サービスの活用とい

う観点から考えた際にも、相談機能と結びつき、「本人を連れてきてしまう」という究極の活用方法である。配食サービスであれば、認知症でなくても利用でき、小規模多機能の登録人数 25 名に縛られることもない。ホームヘルプサービスのヘルパーが、訪問時に本人の状況を判断し、このようなサービスと連携することも可能である。また、緊急時のお泊り希望者として事前に登録し、必要な時に自ら連絡を入れることも考えられる。

受け入れるベッドと夜間に介護・看護してくれる人材の配置、その人の状態の見極めができる配達者やヘルパーまたは状況判断の指示がだせる専門機関との連携があれば可能になる。そして、利用する本人も日常的に慣れ親しんだ場であると、一層安心して利用することができるだろう。

## 2) 支え合いのコミュニティデザイン構築の秘訣

地域住民の力で、100 歳になっても安心してくらするコミュニティを実現した「風の丘」であるが、その推進力となったのは、この地で夫と共に義母とくらしている 60 代になりたての主婦ある。彼女は地域住民の理解力とプライドの高さをよく理解し、「講座」「ゼミ」という形で学習会を地域に周知し、ひらいた形で実施する中で、「福祉のまちづくり」ムーブメントをまち全体を巻き起こした。また、実施している活動や拠点を活かし、サービス利用者だけでなく、地域住民が参加したり楽しめる企画をとおして、人との出会いの場をもプロデュースし、参加の環を広げている。「福祉活動の実践」「勉強会」「出会いの場のプロデュース」という 3 つの要素が連携しながら、動きを加速させ、地域の理解を一層得やすい状況を創りだしている（図 5-1）。これが、この事例のコミュニティデザインを動かす構造ではないだろうか。このようなトルネイド型の好循環を創り出すことで、地域と個人の信頼と協力を集め、「自宅を寄付したい」という申し出や、住民による多額の貸し付けを可能とし、夢を実現させてきた。

その背後には、地域ニーズを身近な問題として受けとめてきたことが原動力になっていた。「隣の奥さんからの夕食作りの依頼」「母の友人の転居」「ショットスティは一人でさびしい」という地域の人々のつぶやき、そして一人暮らしの母のために「この地に、小規模多機能型ホームを作ってほしい」という家族からの依頼。そして土地を寄付してくれた津崎氏の「この地で信頼できる人と暮らし続けたい」という思いやつぶやきによって現れたニーズをどう解決していったらよいか、生活クラブ生協からノウハウを学びながら、迅速に行動に移した第二世代のがんばりが、まちに安心をもたらし、地域のつながりを広げ、老後も住み続けられるコミュニティを創りあげた。「地域が協力し支え合う」コミュニティデザインのモデルである。

助け合いのコミュニティデザインとは、住み手が自ら、他者の協力をえながら心からのニーズを形にかえ実現させていくことである。自ら参加して構築する環境づくりには、しくみや施設などハード、ソフト両方が含まれる。徐々に環境を整えることで、人々のコミュニティへの安心感は増し、まちづくりに参加する人も増えていく。助け合いのコミュニティ